

柿と雪の神楽歌——シャーマン・源典侍

小 嶋 菜 温 子

一、メタファーとしての『採物』——葵巻の「かざし争い」

光源氏論もしくは光源氏の物語論の一環として、第一部の紅葉賀・葵巻そして朝顔巻をよむ。源典侍挿話を基軸に、これまでかえりみられることのなかった、神楽歌の磁場のひろがりを見いだしたい。源典侍から朝顔、そして紫上・藤壺へ——神楽歌のネットワークをみる。光源氏と女君たちは、その文脈にとりおさえられて、ひとつの冬をむかえるのであった。

源典侍と歌謡。その関わりは、ふつう催馬楽引用から説かれてきた⁽¹⁾。猥雑、滑稽な挿話の特徴は、催馬楽の卑俗さとなり、じみやすかろう。が、源典侍挿話には催馬楽だけでなく、すでにのべたように神楽歌も引用されているのである⁽²⁾。そして、その神楽歌引用の射程は、意外にひろい。催馬楽だけでなく、神楽歌もあわせた、つまりひろく神歌の磁場を考える必要があるだろう。光源氏の物語にとって、源典侍挿話はいかなる意義をもつのか⁽³⁾。さらに考察をすすめることにしよう。

前稿にたしかめたのは、葵・賢木・朝顔巻における神歌的な表現であった⁽³⁾。神の「しるべ」と「しるし」をもとめて、

光源氏は栄華の道を模索する。たとえば濡標巻の住吉社頭での奉納のことは、後藤祥子『源氏物語の史的空間』に論じられるところだ。⁽⁴⁾ 彼にとって、女君たちとの交流や人間的な試練も、神聖なる世界との合一のためにあるともしうる。であるがゆえに、ときに神の「いさめ」をやぶらねばならないという矛盾。そして、神の「ゆるし」を乞うイロニイ。聖婚に擬される后妃・藤壺との密通をはじめとした、女性たちとの物語に神歌の磁場が形成されるのは必然であったのだ。

なかでも、源典侍の物語は、神歌のネットワークの発信源とみなされる。神楽歌引用の起点として、神歌の磁場の光源として、源典侍挿話はあること。それをあきらかにするべく、手はじめとして、葵巻からもういちどたどりなおしていきたい。

葵上と六条御息所の車争いという緊迫した場面を縫うように、源典侍は登場した。前稿で簡単に触れたように、そこで典侍は神楽歌の「採物」を歌に詠む。そのことによって、物語は神歌の磁場にとりこまれることになるのだ。典侍の歌をふくめて、光源氏とのやりとりを引いておこう。

はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしのけふを待ちける

注連の内には」とある手を思し出づれば、かの典侍なり。「あさましよう、古りがたくも今めくかな」と憎さに、はしたなう、

かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

女はつらしと思ひきこえけり。

くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

と聞こゆ。……「いどましからぬかざし争いかな」とさうさうしく思せど……⁽⁵⁾

葵祭にちなんで、三首とも「かざし」(「採物」)によるものとなっている。「かざし」(採物)は依り代(あるいは魂ふり)の具とされ、神と人とをむすびつける媒体だった。典侍の最初の歌は「あふひ」を詠む。その呪力と、「あふひ」の言語的

な効力（葵―逢う日）に老女の恋のうらみは託されている。「神のゆるし」をねがって光源氏との逢瀬をまっていたが、それもいまは「はかなしや」、あなたは人の「かざし」になってしまったのですね——と。光源氏は紫上とお忍びの車中であり、他の女性には手がとどかない。歌にくわえて、それをさらに「注連の内」——「禁域」にあるとする、典侍のうらみごとは光源氏の感じたとおり「今めく」ものだろう。「憎さ」をおぼえながら、光源氏はひととおりの応答をする。典侍の歌に導かれて、やはり「かざし」を詠みこんだ歌で応酬する。これを「かざし争い」と源氏が思うわけであるが、その「争い」の内実はどうであったか。葵をめぐる修辞上の対応はそれとして、二首の連絡が見えにくい気がするのなぜか。典侍歌の「人のかざせる」をうけて、「かざしける心」をと源氏は答える。その変換に、どうやら鍵はある。引歌からそのことを説いておこう。

神楽歌の引用をここにみよう。「八十氏人」は諸註いうように、好色な典侍の“多くの相手”を指そうが、その表現の典拠には左の神楽歌を考えるべきではなからうか。⁽⁶⁾ 神楽歌の採物（榊）の歌をひく。⁽⁷⁾

榊

本

榊葉の香をかぐはしみ 求めくれば 八十氏人ぞ 円居せりける 円居せりける

未

神垣の 御室の山の 榊葉は 神の御前に 茂りあひにけり 茂りあひにけり

典侍が源氏を「あふひ」になずらえ、人の「かざし」となってしまったとした。それをうけて源氏は源氏で、葵を「かざし」た典侍の「あだ」なる心をつく。あなたの「かざし」は、わたしに会うために「あふひ」（葵）を「かざし」たものではないでしょう。むらがる「八十氏人」と会うための、「榊葉」だったのでは……。神楽歌の引用をふまえてよめば、光源氏の歌はそのように解釈されることになるだろう。「八十氏人」も、神楽歌にあつては神前に集う善男善女であったはず

が、ここでは典侍にむらがる男達という意に転換されてしまった。

そのように肩すかしされたからこそ、典侍は「かざし」の葵に恨みごとを託したことを悔やむ。「あふひ」に託された言葉の呪性も、呪具としての効力も無意味だった。光源氏の歌によって典侍の「かざし」は、あだなる「八十氏人」との浮わついた結び目でしかなくなる。光源氏とのあいだは、皮肉にも閉ざされてしまう。「あふひ」にさらに「榊葉」をかさねることで、本来の「かざし」の呪力は消されてしまった。採物の本義を転換させる。そのことによって、両者の奇妙で微妙な関係は保れたのだともいえる。光源氏と典侍の応酬——「かざし争い」の意味は、そこにあるのではないだろうか。

メタファーとしての採物。ここにみた神楽歌の引用は、賢木巻の野宮のくだりに引きつがれている。そのことについては前稿にのべたので詳述はさけるが、六条御息所と光源氏とのやりとりのなかに「榊葉」がよみがえる。「かざし」の採物はそこでは、光源氏の前から失意の御息所をとおざける喩的な働きをもっている。「葵」や「榊」あるいは「注連」。それらに封じられた神の禁域が、光源氏を女君たちから引き離そうとする。朝顔巻の齋院の物語もその一環としてあることのべた。

典侍の「かざし」の歌から、すべてははじまった。葵祭という場と不可分に、しかし源典侍という女人の根源に、神歌の磁力は関わっているらしい。光源氏をとりまく群像のなかにあつて、この異色の老女は大きな役割をはたすのではないか。そしてその挿話は、源氏の物語そのものの原基をえぐりだすのではないだろうか。源典侍挿話にたちもどつて、ことの本質をさぐることにしよう。

二、源典侍と光源氏——神楽歌・催馬楽のかさなり——

紅葉賀巻。光源氏・藤壺の秘められた関係を底流として、若紫や葵上とのいわば家庭劇が語られる。巻頭は、華麗で重苦しい、あの青海波の場面がかざる。ほどなく不義の皇子（冷泉帝）の誕生から、藤壺の立后へ——光源氏の物語はこの

巻において、重大な局面をむかえることになる。

「をこ」を基調とする源典侍の物語は、そうした緊張感あふれる展開をぬうようにして差し挟まれたのであった。一見して余談のようにみえる、貴公子と老女との戯れ。源典侍の挿話は猥雑かつ滑稽なだけで、おおむね光源氏の主流の物語からは逸脱したプロットとみなされてきた。たとえ趣向であったにせよ、試練にたちむかう光源氏の青春のひとこまというにはあまりにも御粗末な、恥部の暴露にも似ていようか。優雅で悲壮な物語の流れをさしとめるようにして、異和はあたらされた。典侍という人物が異端的な存在であること以上に、老女にかかづらわる光源氏そのものが、物語から逸脱しているかにみえる。

しかし、はたしてこの挿話は、猥雑で卑俗なコメディにすぎないのだろうか。神歌のひろがりは、以下でさらにはっきりしてくる。この挿話が光源氏の物語にあたえる、異和の意味はあらたに問いなおされてくるのではあるまいか。第一部の光源氏物語の全体像のなかで、源典侍挿話の意義を考えよう。

紅葉賀巻をふりかえろう。光源氏・藤壺の罪の子、冷泉帝が誕生する巻である。緊張感と同巻の冒頭に描かれる青海波の場面からすでにみなぎっている。源典侍のエピソードはそうした緊迫感にみちた展開の合間をぬうようにして、差し挟まれるのだった。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせありて、あてにおぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまでなどさしも乱らむ、といぶかしくおぼえたまひければ、戯れ言いひふれてこころみたまふに、似げなくも思はざりける。

はじめて源典侍が登場したとき、彼女にはプラス・マイナスふたつの面があることが紹介された。「人もやむごとなく心ばせありて」、「あてにおぼえ高く」ある——高貴で由緒ある出自だという顔。そして老女でありながら、好色で「あだめいたる」顔。光源氏はそのうちの「あだ」なる面に興味をもち、戯れかける。実際は「似げなく」、不釣り合いな組み合わせ

せのはず。が、当の典侍にとればまんざらでもなく感じられるというところから、ふたりのエピソードははじめられていく。源典侍という人物については、このようにして常識はずれな性情が印象づけられてしまふのだった。

では、「やむごとなく」「あて」なる顔はどうなるのだろうか。源典侍のその後の振る舞いは、おおむね滑稽に描かれる。そのため彼女のプラスの面のほうは、さほど気にされずにきたようにも思う。そもそも源典侍が源氏であるのは、いうまでもない。皇統（わかんどおり）⁽⁸⁾なのである。猥雑な趣きとともに、高貴さが彼女には与えられていた。そのことを忘れてはなるまい。

歌謡の引用についても注意を要する。催馬楽という歌謡には卑俗な性格がつよく、おおかたのみる源典侍の造型とよくなじむにちがいない。⁽⁹⁾げんにこの挿話に催馬楽が引用されることは、よく知られている。しかし、それだけではなく神楽歌が、源典侍挿話を解説する鍵となっているのである。

ふたりのやりとりがはじめて描かれる、お湯殿の場面に、そのことを確かめる。この場面が多く和歌の引用からなることは指摘されてきたとおりだ。修辞のちからを借りて、ようやくこの不似合いで滑稽な「恋」は語られえたということだ。その修辞に神楽歌の引用をも、加えておくべきなのだ。

……さも旧りがたうもと、心づきなく見たまふものから、いかが思ふらんと、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならずゑがきたるを……

片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず、「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、言しもあれ、うたての心ばへや、と笑まれながら、「もりこそ夏の、と見ゆめる」とし何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけん、と苦しきを、女はさも思ひたらず。

君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも

といふさま、こよなく色めきたり。

笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ

わづらはしさに」とて、立ちたまふをひかへて……

典侍はいつもより優美なさまであった。いっぽうでは「心づきなく」思いつつも、「さすがに過ぐし」がたく、光源氏は彼女の裳の裾をひいてしまう。ふたりの関係は、ここからはじまった。源氏のほうから先に、かかづらわってしまったのである。扇を交換すると、典侍のには森の絵がかいてある。その面に「森の下草老いぬれば」と書きちらしている。源氏が「うたて」さを覚えたのは、老女の下の方が見えたからだ。言葉をかわしながら、光源氏は「似げな」き間柄を人が見たらどう思うかと案じる。その心苦しさをよそに、典侍は歌いかける。「君しこば……」——あなたがいらっしやるのならば「駒」を「飼」いましょう、「さかり過ぎた下葉」(老いた「森の下草」)で——と誘いをかける歌である。上の句はさほどでもないが、下の句はどことなしにエロティックだ。「こよなく色めきたり」と草子地にも評される。好色な典侍像は徐々に積みあげられつつある。

源氏の歌の趣旨は、いつも色んな「駒」がなついている「森」だから、「笹分けて」いったとしたら人が「咎め」ましようというもの。好色さをかるく揶揄してはいるものの、贈答の呼吸を破壊することなく、ほどほどの情趣で応えているのである。かくして光源氏は、老女と語りあうこととなる。「わづらはしさに」と、立ちさろうとしたが結局、引きとめられてしまうのであった。

彼のほうから先に裳すそを引いた義理はそれとしよう。典侍と源氏の唱和は、通常ならありえないような性的なニュアンスを微妙にただよわせている。そうした展開をうとましく思いながら、光源氏は老女の誘いを回避できない。源氏は誘いを無視するとまではいかずとも、振りきることもできたはずである。にもかかわらず「笹分けば……」と答えてしまうのはなぜだろう。⁽¹⁰⁾典侍の歌のどこに、源氏をつなぎとめる力があるのだろうか。

ふたたび引用を考える。典侍の歌にこめられた、避けがたいほどの挑発。引用のかなたに、そのエネルギーは透かし見

えてくる。まず、「森の下草」以下、傍線を施した箇所について、従来からつぎのような本歌が挙げられている。

大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし

(古今・雑上、古今六、和漢朗詠)

ほととぎす来なくを聞けば大あらしの森こそ夏のやどりなるらめ

(信明集)

わが門のひとむら薄刈り飼はむ君が手なれの駒も来ぬかな

(後撰・恋二)

笹分けば荒れこそまさめ草枯れの駒なつくべき森の下かは

(蜻蛉日記)

これら歌群を総合してみる。「やどり」としての「森」と、「駒」。そして「駒」のために「草」を「刈る」という連想がかびあがる。ただ、これらの歌を背景におくだけでは、典侍の歌の挑発性は鮮明にならないのではないのか。

ここで、ふたたび神楽歌の集をひもといってみよう。つぎにあげる、「其駒」が参看されるべきではないだろうか。

其駒

本

葦ぶちの や 森の 森の下なる 若駒率て来 葦ぶちの 虎毛の駒

末

その駒ぞ や 我れに草乞ふ 草は取り飼はむ 水は取り 草は取り飼はむや

ここに謡われる内容は、おおむね先に列挙した歌群と重なる。「森の下」と「駒」の対置。「草」を「刈る」という連想。いずれも引用歌群と一致する。ここで本の歌にみるべきは、「若駒率て来」というフレーズだろう。典侍の「君し来ば」の

背景に、これをおいてみる。そうするとき、光源氏こそは「若駒」だということになる。さすれば、老女との年令の落差はいよいよ際立とう。

本の歌の「率て来」という能動表現が、典侍の歌の初句では「君し来ば……」と受け身に転換される。もしあなたがいらっしゃるのなら……という仮定にもとづく、婉曲的ないまわしにかわる。そこに神楽歌の末の歌の趣旨をいかせばどうか。婉曲さは一転して、過激な挑発にかわりはしないだろうか。典侍の歌の第二・三句「手なれの駒に刈り飼はむ」に末の歌を響かせてみるとどうか。末の歌——その「駒」がわたしに「草を乞う」ているから「草」を「取り飼」おう。つまり、「駒」が欲するから「草」を与えて「飼う」というものだった。ひらたくいえば、あなたが欲しているのだから、どうぞ……ということ。

典侍の歌にそのような意味がこめられている。としたらその挑発を、光源氏は退けうるか。源典侍と光源氏を結びつけるべく、神楽歌の強い磁力がたちはたらいた。そのことを見おとしてはなるまい。

葵巻で確かめられたのとおなじく、紅葉賀巻の源典侍も神楽歌の磁場において造型されているのである。催馬楽的な側面でのみとらえられてきた源典侍挿話であるが、いまあらたな視点から再読されよう。神楽歌・催馬楽。その両義のはざまに、源典侍挿話は根をおろすのではあるまいか。⁽¹¹⁾

三、「あだ」にして「あて」なる源典侍——朝顔の巻へ

前節に触れた、典侍についての紹介を思い起そう。「あだ」な人柄ではあったが、「やむごとなく」「あて」であるというプラスの評価も与えられていたのだった。光源氏との交際では、マイナス面のほうが印象ぶかいたため、その高貴で優雅な顔のほうはつい忘れられがちである。お湯殿の場面で「常よりもきよげに様体頭つきなまめきて……」とされもしたが、その風情は、扇にかくれた老醜とのコントラストを描きだす役目におわっている。優雅な風情が風情として、効果をもつ

場面はないのだろうか。

二度めの逢瀬が描かれる、温明殿の場面に目を転じよう。いわれるように温明殿は神鏡を安置する賢所のある神聖な場所。内侍所もまたそこにあった。その位置が源氏に、不釣り合いな相手と結びあわせてしまったのだろうか。彼の意志とは別に、語らいの場面へ誘いこむ何らかのちからが働いている。

……夕立して、なごり涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみ歩きたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きあたり。御前などにも、男方の御遊びにまじりなどして、ことにまさることなき上手なれば、もの恨めしうおぼえけるをりから、いとあはれに聞こゆ。「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうて謡ふぞ、すこし心づきなき。愕州にありけむむかしの人も、かくやをかしかりけむと、耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、いといたう思ひ乱れたるけはひなり。君、東屋を忍びやかに謡ひて、寄りたまへるに、「おし開いて来ませ」と、……とてうち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくや、と思ひかへして、人に従へば、すこしはやりかなる戯れ言などいひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。

典侍の好色、その老残の見苦しきについて、物語は強調してきた。光源氏も気の毒に感じつつ、なかなか相手をつとめる気にならないまま日が過ぎていた——そんな夏の宵のことである。琵琶を「いとをかしう」弹奏する典侍。「いとあはれ」なその響き。催馬楽「山城」を口ずさむその心は、光源氏をあきらめて「瓜作り」にでもなろうかという恋に悩める女の嘆きのそれである。この様子に光源氏は中国の故事を想いうかべ、「かくやをかしかりけむ」と耳をとめる。弾きやんで思ひ乱れている彼女の「けはひ」もまた、まことに情感にあふれている。いつもならマイナスにはたらく猥雑さは、ここから感じとりにくい。かくして、うとましく思われる相手であったはずなのに、光源氏は情趣にみちびかれるようにして、「東屋」をくちずさみ近寄ってしまうのであった。そしてその催馬楽「東屋」の引用によって、老女は誘いかける歌を詠み、不似合いながら源氏はやりとりに応じていく。源典侍が温明殿のあたりで琵琶を奏でながら、催馬楽の「山城」を

くちずさむ。光源氏との逢瀬が語られるうちの二度目、つまり頭中将とのさやあてに先がけての場面は、催馬楽なくして成り立ちえないといってよい。光源氏も催馬楽の「東屋」を、典侍が「おし開いて来ませ」と歌謡の一節を引きながら答える。それにつづく贈答もおなじ歌の引用からなり、「めづらしき心地」で光源氏は老女と契るのだった。多分にエロティックな展開の影で、催馬楽「山城」「東屋」のもたらした効果は大きい。そのことについてはすでに研究されつくしている⁽¹²⁾ので、ここではこれ以上触れることもないだろう。

性的なニュアンスをたぐりよせつつ、描写は情趣を優先させている。その情趣にひきこまれていく光源氏。彼は「戯れ言」をかかわすのも、「めづらしき心地」と感じてしまう。そのように情趣をもちたてる語りなしを、神楽歌と催馬楽がささえている。神楽歌と催馬楽の表現がからみあって、源典侍挿話はおこなされた。いかえれば神歌の磁場が、光源氏を老女との艶なる関係にみちびいたのであった。

紅葉賀巻の源典侍——それは、神歌の呪力によって、聖・俗の両義から光源氏をとりおさえ、エロスと身体の混沌へと連れだすシャーマンだった。そのように考えることができるだろう。

ところで、紅葉賀巻ののち、源典侍の姿は物語から遠のく。さいごは朝顔巻で、ふいに源氏のまえにあらわれて驚かせる。源氏は朝顔前斎院への執着にかられて、式部宮卿邸訪問をくりかえしていたところだった。典侍は、朝顔の叔母・女五の宮の仏弟子となって、式部宮卿邸に住みついていたらしい。それにしても、忘れたころのその出現に唐突感はいなめない。なにか隠れた、必然性はないか。女五の宮邸の「古さ」が、老女・源典侍をよびよせたとの読みは一理ある⁽¹³⁾。それにくわえて、いますこし積極的な理由はもとめられないだろうか。

ひとつには、老いの問題を介して、源典侍が藤壺とパラレルにあることが考えあわせられる。老女・源典侍における究極の老いは、老いることをゆるされない藤壺の罪を逆証する。そのことについて、別にのべた⁽¹⁴⁾。朝顔巻でも、源氏はますます老いた典侍をみて、亡き藤壺の「齢」に想到する。

さらに考えるべきこととして、神楽歌にかかわる問題があるのである。前稿では「神のゆるし」「神やいさめむ」の歌語の連関から、源典侍と朝顔の結びつきをのべた⁽¹⁵⁾。さらに、神楽歌引用にしたがって、つぎに補説しておきたい。朝顔と源典侍そしてさらに藤壺は、朝顔巻を覆う神楽歌の磁場によって結びつくと考えられるのである。

四、秘められた雪祭り——朝顔から藤壺へ

二条院の冬——朝顔巻は不思議な巻だ。秋山虔のするごとく、藤壺なきあと、紫上の位置の据えなおしが巻のひとつの眼目であることはそのとおりだろう⁽¹⁶⁾。にしても、朝顔に固執して式部卿宮邸の来訪をくりかえす源氏、そしてそこに突如あらわれる源典侍。また、源氏の思ひ出話をきっかけに藤壺の亡霊があらわれたり……。と、まとまりに欠け、どこか落ち着かない巻であることもたしかだ。だが、朝顔巻の細切れのプロットをぬいあわせるように、神楽歌のネットワークが張りめぐらされているのである。

藤壺の死去による、諒暗の冬——それが朝顔の舞台背景であった。清水好子のするとおりの「藤壺鎮魂」の巻に相違ない⁽¹⁷⁾。いっぽう、野村精一は朝顔巻に、「神話的タブーからの解放」をみる⁽¹⁸⁾。たしかに諒暗の仏教的な時空は、神事を排するものであった。そうした発想は、藤本勝義の『源氏物語の物の怪』により深められていく⁽¹⁹⁾。藤本氏によれば、「神事の期間」は、物の怪が暗躍するのに格好の時期」という。であるとするなら、しかし、神事を排する朝顔巻に、なぜ藤壺は物の怪化するのだろうか。雪の日——源氏の朝顔訪問は、つぎのように語りだされていた。

夕つかた、神事などもとまりてさうぞうしきにつれづれと思しあまりて、五の宮に例の近づき参りたまふ。雪うち散りて、艶なる黄昏時に、なつかしきほどに馴れたる御衣どもを、いよいよたきしめたまへば、いとど心弱からん人はいかがと見えたり。

(四六九)

「神事」の停止。そのこと自体にさほど重さはなく、あたかも源氏の朝顔訪問の口実であるかに書きなされている。だ

が、たしかに、この設定には重要な意味がふくまれているだろう。ただし、神事の停止がすなわち、神的なるものの不在を意味するかどうかについては慎重でありたい。

鍵をにぎるのは、「雪」だ。

みぎの場面もふくめた朝顔巻の「雪」には、秘められた意義がみいだされてきている。林田孝和はつぎのように説く。⁽²⁰⁾

……雪をたんにつくしいものと観じ賛美する古今的伝統美とはおよそ裏腹の、病める魂の彷徨する内的世界、精神世界を雪の夜を背景に描写しきっているのである。

朝顔巻を埋めつくす、雪の呪力。

雪——シャーマニクな、招魂の依り代としてそれを考える。そのとき、すぐさま浮かぶのは、つぎの神楽歌の言葉ではないだろうか。

採物 或説篠 (本)

篠の葉に 雪降り積もる 冬の夜に 豊の遊びを するが楽しさ

みぎの採物「篠」の神楽歌。これは「篠の葉」に「雪降り積もる」、「冬の夜」の情景をうたう。でありながら、その自然景は、「豊の遊び」の祝祭の時空であるのであった。「豊の遊び」とはいうまでもなく豊明節会のこと。新嘗祭(十一月の下の辰の日)に設けられる宮廷神事である。「豊の遊び」の「楽しさ」とはなにか。おそらくその中心は、五節舞姫の奉納であると考えられる。五節はほんらい、神宴の歌謡音曲への奉仕を目的とするだけでない。天皇との結びつきにおいて、身体・エロスの秘儀のためにあった。そのことについては、さいきん別稿にのべた。⁽²¹⁾ 丑の日から始まる舞姫献上、そして辰の日は淵酔(えんずい)と称するファナティックな饗宴の当日にはかならなかった。「篠」という依り代に、神を招ぎおろす。雪——天地の境界を越えて降り積もる雪。それもまた、招魂の依り代にちがいない。五節にシンボライズされる、呪的な神遊びの時空。みぎの神楽歌は、そのようなシャーマニクな魂の跳躍を高らかにうたいあげるのではなからうか。

朝顔卷の遠景として、みぎの神楽歌をよみとることはあながち不当ではない。まず、さきにみた源氏の朝顔来訪の場面をもう一度かえりみる。

……薄らかに積れる雪の光あひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。

神楽歌との照応を、わずかにせよ見いだせよう。「積もれる雪」「おもしろき夜」——。そこには神楽歌の、「雪降り積もる」「冬の夜」が、そして「豊の遊び」の「楽しさ」が響きあうのではあるまいか。

そういえば、神事の停止によるつれづれに、源氏は朝顔を訪れたとあった。藤壺の諒暗のため、神事は停止された、そのことはプロット上の事実にちがいない。だが、物語の言説は、そのプロットをうらぎる。朝顔卷には、魂をゆするような「豊の遊び」のシャーマニックな磁場が張りめぐらされようとしている。秘められた、冬祭り。雪祭り。そうした深層のコンテクストのなかで、光源氏はそして女君たちほどのように語りこめられていくのか。見さだめていこう。

源氏は「雪の光」に一層うつくしく(四七〇)、だがしかし、「雪の光」のもと朝顔への求愛はむなしく拒絶される。

年ごろ沈みつる罪うしなふばかり御行ひを……

これは朝顔が源氏を拒みつつ、齋院時代の罪(仏事を忘れた罪)をあがなおうと決意を固めていくところ。神の罪については、それをあがなう法がはたしてあるのかどうか。六条御息所を追いこんだその難題に、朝顔もまたとりこまれていく。⁽²²⁾朝顔の魂も、いかようにして救われるか。物語はそれ以上の追求をしない。そして考えてみれば源典侍とて同種の罪をになうはずであったが——。とにかく、源氏が雪に惹かれ心あくがれているのに対して、彼女はかわらぬ拒否の姿勢をつらぬくだけだ。そうした朝顔のつよい意志だけが、雪に照りはえるかのようだ——。

雪の呪力については、雪まろばしの条により鮮明なだった。

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光まさりて見ゆ。「時時につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光あひたる空こそ、あ

やしろ色なきものの、身にしみて、……

(四八〇)

「雪のいたう降り積もり」は、たんなる自然描写か。また、「松と竹とのけぢめ」云々、あるいは「冬の夜」も、ただの自然景のためにある言葉だろうか。いやちがう。ともに、さきの「篠」の神楽歌の引用でもあるとすべきだろう。「竹」は「篠」の縁語でもある。「篠」の神楽歌をもういちど対照すればよい。

篠の葉に 雪降り積もる 冬の夜に 豊の遊びを するが楽しさ

「竹——篠」に「雪降り積もる」神遊びの時空。源氏がいま紫上とおくる「冬の夜」は、とくべつな「冬の夜」。朝顔来訪とおなじく、豊明節会の雪の夜としてかたどられているのだ。時間は停止している。シャーマニクな魂の時間だけが、たゆたうだろう。源氏はここでも、「雪の光」と輝きをきそい、冬の雪に感応する。その源氏の美意識については高橋和夫が論じるとおりだが、彼の魂はうばわれている。

そして、雪の呪力に囚られるようにして、紫上を相手に語りつづける源氏。藤壺との雪の思い出をはじめ、朝顔、朧月夜、花散里。主要なヒロインたちを回想し語りきかせた。その夜、藤壺の霊魂はたちあらわれたのであった。藤壺をして物の怪と化せしめたのは、雪の呪力、ひいては神楽歌のシャーマニクな力であるとしうる。

むろん、紫上のあずかるところも無視できない。が、彼女もまた、雪の呪力にとりおさえられている。

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

こほりとち石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる

外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて、めでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

かきあつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか

(四八四)

紫上は、雪に「ゆきなずむ」女心を歌いこめた。が、その無類の美しさ、「髪ざし」「面様」は、噂したばかりの故藤壺を彷彿とさせる。紫上から藤壺へ。藤壺から紫上へ。その往還をくりかえすことで、光源氏と紫上の関係は維持されていくのだ。「むかし恋しき雪」——「雪」とは、秘められた藤壺との関係をたぐりよせる契機にはかならないのであった。

この場の雪については、鈴木日出男が「雪はここでも、きびしい終末的な悲しみとともに、死者幻影というもう一つの世界をとりこめている。」としていた。⁽²⁴⁾さらに林田論をふまえるなら、雪が藤壺の「幻影」をよびよせたことになる。招魂としての雪、ミタマフリとしての雪の呪力。紫上——藤壺をつなぐ、秘されたシャーマニズムを解説しておかねばなるまい。

むすび——藤壺の罪

朝顔巻には、神楽歌の磁場が張りめぐらされていた。藤壺の諒暗のために神事が停止し、仏教的なトーンが濃厚なはずの巻だった。だが、言説はその深層において、秘められた神遊びの時空をかたどっていく。秘められた冬祭り。雪祭り。魂をゆする、シャーマニックな時空に、源氏も女君たちもおかれる。藤壺の亡魂までも——。

藤壺の罪。朝顔巻末は、そのことを強調する。仏教的な文脈で、源氏たちは藤壺の罪の軽減をねがう。が、すくなくとも、この朝顔巻が神歌に貫かれているかぎり、それはなしえない。朝顔の罪の残留も、そのことと無関係ではなからう。それよりなにより、藤壺の罪は、この巻の神楽歌引用があらたにつくりだしたとすべきではないか。光源氏が藤壺の想い出を語ることで、二人の罪とエロスを喚起せずにはおかない。くわえて、「篠」をたどり、そして「雪」をたどって、異界から藤壺の罪の身体がたちあらわれるのではなかったらうか。神楽歌の磁場によって、藤壺の罪は刻印されたのだ。

源典侍の唐突な再登場が、発端にあったことは忘れてはなるまい。神楽歌の磁場は、典侍によってもたらされたに相違ない。かつて源氏の魂をうばい、籠絡した老女・源典侍。そのおぞましいまでの身体・エロスは、物語のシャーマニズム

が必要としたのだ。彼女こそ、ミタマフリの依り代であるという、比喩さえなりたつであろう。藤壺の亡霊が浮遊せねばならなかった、その最大原因として、源典侍というシャーマンはあるのだった。巫女論の必要性にあらためて気づかされよう。⁽²⁵⁾ 源典侍もまた、巫女なのだ。

源典侍を原点として、考えること。神楽歌のネットワークの、結節点として典侍の存在はあること。そのことの意味を反芻しておきたい。犯罪的なまでのその猥雑さには、みてきたようなシャーマニックな牽引力が秘められていた。第一部・光源氏の物語において、源典侍の起爆力ははかりしれないものがあるはずだ。それこそは、聖なる暴威であり、あらゆる力であるというべきではないか。光源氏そのひとの神聖さのその根源を、そこにひそむ暴威をあげきたてる。そうした触媒として、源典侍という身体・エロスはあったのだと、いまにして、思い知らされよう。源典侍にかかわり、また彼女がもたらす言説のうねりからめとられて、光源氏は生きる。聖なる暴威の、あらゆる光の言説のあいまを――。

神歌との戯れをとおして、光源氏の物語は、身体・エロスを深くかかえこむ。またそれによって、源氏の罪が、犯しが増幅されていく。そして藤壺の罪もまた、秘められた神歌の文脈のなかで、増殖されていくのである。⁽²⁶⁾

六条院造営はちかい。光源氏の王権の主題は、いよいよその原基をあらわにしはじめている。あらたな王国の現出というプロットとはべつに、聖なる暴威のカオスへと、物語の言葉は降り立つのである。

無化しえず、無化されえない罪――光源氏になう重い負荷が、言説に胚胎するその瞬間瞬間を、見のがさずにおきたい。⁽²⁷⁾

また神楽歌にさしつらぬかれた光源氏の物語に胚胎する、神の罪の問題については、別にのべた。異化の物語のその原基にある混沌。物語のカオスの海に、罪はことごとく発生するのだと考えられるのである。

- 1 伊藤博、三谷邦明らの研究をふまえて、わたくしにまとめた。拙稿「光源氏の〈犯し〉をめぐって——源典侍挿話と「をこ」」「日本文学」一九八八・一二。藤壺・光源氏のタブーへの違反の光源として、源典侍挿話を位置づけようとした。
- 2 拙稿「源氏物語に見る歌謡」『国文学 解釈と鑑賞』一九九〇・五。

また、鈴木日出男「源典侍と光源氏」(『国語と国文学』一九九二・四)も、源典侍と内侍所の神楽歌との結びつきから、典侍の「神さびた」一面、その巫女的な性格を論じて示唆に富む。

- 3 注2の拙稿。

- 4 後藤祥子『源氏物語に史的空間』東京大学出版会、一九八六。

- 5 源氏物語本文は小学館の全集版による。

- 6 「八十氏人」の典拠を神楽歌の歌詞に特定するのは、つぎのように考えられるからである。

「八十」は、たとえば八十国、八十島などの成語にうかがえるような一般的な数詞である。「やそをとめ」(万葉、四一四三)あるいは、「やそとものを」(万葉、四〇九八)あたりも、多人数を意味する語として「八十」が用いられているよう。

ただ、おなじ「やそとものを」でも、古事記・下の「天の下の八十友緒の氏姓を定め賜ひき」、もしくは延喜式祝詞(六月晦大祓)の「伴の男の八十伴男を始めて、宮々に仕へ奉る人等」などの用例になると、いますこし限定的なニュアンスが付加されるのではないか。国家・宮廷の構成員としての、「八十とものを」なのだ(考えてみれば、八十国や八十島にも、それにちかい意味あいがまじるともいえる)。

「八十氏人」もまた、そうした国家的・宮廷的なコスモロジーをになう語彙であっただろう。土佐に配流される、石上乙麿の歌、

参る上る 八十氏人の 手向けする かしこの坂に 幣奉り(万葉一〇二二)

の「八十氏人」も、一〇二〇「大君の 命かしこみ」に対応するはず。タブーに違反し追放される身でありつつも、国家・宮廷の構成員——「八十氏人」として、神に手向けする。その恭順の姿勢の強調が、この一首の含意するところであると読める。

本稿にみる神楽歌「榊」は、以上のような語誌を背景にすると考えてよからう。そして、光源氏の「八十氏人」の歌、その神楽歌の「八十氏人」をとりこむことによって、神のコスモロジーににじりよる。

源典侍と光源氏の浮薄で猥雑な応酬は、そのような秘められた呪的なコンテクストによって裏打ちされていることを見のがさないでおきたい。

7 神楽歌の本文は小学館・全集版による。

8 三谷邦明『物語文学の方法II』有精堂、一九八九。

9 源氏物語における催馬楽の意義については、植田恭代の一連の論に教えられるところが大きい。植田「源氏物語における催馬楽引用——「東屋」巻の場合」(『中古文学』第四三号、一九八九・五、など)。

10 「笹分けば」は、神楽歌「笹」の謡いだし部分である。神楽歌の磁場はしらすしらすのうち意図されていくようだ。

11 神楽歌の「その駒」は、「本は風俗云々」との注があり、なるほど俗謡の名残の濃い歌といえる。これについて高橋文二「神事歌謡」(『講座 日本の古代歌謡4』、平凡社、一九八〇)のなかで、「これこそまことの土俗的な神々への賛歌であり鎮詞であるように思われる。」とする。同時に氏は、神楽歌が神事歌謡本来の性格から逸脱する、「遊び」や「をこ」を内包することを論じ興味深い。

神楽歌とはなにか。神楽歌—聖、催馬楽—俗というかつての区分は、さいきん相対化されつつある。小学館・神楽歌の臼田甚五郎解説においても、神楽歌と催馬楽の「重なる構造」が言及されている。ジャンルの垣根を、いちどはずしてかかる必要があるということだろう。

ことは源典侍挿話の意義を考察するうえで、きわめて示唆的にちがいない。

12 注1。

13 森藤侃子「朝顔巻の構想」『講座 源氏物語の世界』有斐閣、一九八〇。

14 拙稿「老いの身体と罪——かぐや姫から光源氏まで」『日本の美学』一九九四・一二。

15 注2の拙稿。

- 16 秋山虔「紫上の変貌」『源氏物語の世界』東大出版会、一九六四。
- 17 清水好子『源氏の女君』塙書房、一九六七。
- 18 野村精一「槿」『源氏物語必携』学燈社、一九七八。
- 19 藤本勝義『源氏物語の物の怪』笠間書院、一九九四。
- 20 林田孝和『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三。二九三頁。
- 21 拙稿「宮廷と神仙——仁明朝の常寧殿と五節」『古代文学講座3 都と村』勉誠社、一九九四。
- なお、豊明節会の呪的な意味については、久富木原玲「天界を恋うる女君たち」(『国語と国文学』一九八九・一〇)に論じられている。

また、松井健児「幻巻の十一月——光源氏と五節舞姫」(『国語と国文学』一九八八・一)は、源氏物語における五節の意味を明らかにし、教えられるところが多い。

- 22 神の罪については、拙稿「女三宮・柏木から六条御息所へ」『日本文学』一九九三・五。
- 23 高橋和夫「雪まろげ」『講座 源氏物語の世界』有斐閣、一九八〇。
- 24 鈴木日出男『源氏物語歳時記』筑摩書房、一九八九。
- 25 源氏物語における巫女性、あるいは呪的なものについては、鈴木日出男「朱雀帝と光源氏」(『成城国文学論集』第13集、一九八一・三)、同「源典侍と光源氏」(注2)。さらに、久富木原玲「朧月夜の物語」(『源氏物語の探究』第十五輯、風間書房、一九九〇)、同「齋宮の母・御息所——源語における伊勢神宮の磁力」(『日本文学』一九九三・五)に学ぶところが大きかった。記して謝したい。
- なお、それらつづくものとして、河添房江「朱雀皇権の巫女・朧月夜論」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三)、同「六条御息所物語のドラマトゥルギー」(『共同討議 物語文学の人間造型——源氏物語の以前以後』『国文学』一九九三・一〇)なども参着される。また、原岡文子「遊女・巫女・夕顔」(『源氏物語 両義の糸』有精堂、一九九一)も示唆的である。
- 藤壺の罪は実体的なものではない。それについては、関根慶子「藤壺物語はいかに扱はれているか」(『国語と国文学』一九五二、

『日本文学研究資料叢書 源氏物語Ⅲ』有精堂、所収）においてはやくに看破されている。

三谷邦明「藤壺事件の表現構造」『物語文学の方法』（有精堂、一九八九）にならうと、藤壺の罪は言説がつくりだす。そして藤壺にかぎらず、光源氏の罪もまた同様であること。それについては、拙稿「光源氏とかぐや姫——須磨・明石そして桂へ（『季刊文学』一九九四冬）を参照されたい。

27

拙稿「女三・柏木から六条御息所へ——神の罪そして異化の言説」（注22）。